

久保田淳

大島貴子

校注

藤原澄子

松尾葦江

今物語・隆房集・東斎随筆

中世の文学
三弥井書店刊

今物語・隆房
集・東斎随筆
中世の文学
第一期・第七回配本

定価 三三〇〇円

昭和五十四年五月二十一日 第一刷発行

校注者

久保田淳・大島貴子
藤原澄子・松尾葦江

発行者

吉田栄治

製版所

栄泰印刷

発行所

株式会社
三弥井書店

東京都港区三田三二一六

電話東京(〇三)四五一九五四〇
振替口座 東九一二二二五番

目次

解 說	三
凡 例	八七
隆房集	八九
今物語	一一九
東斎隨筆	一六九
補 注	二三五
索 引	三二三

解 説

『隆房集』

一 諸本とその成立

〔一〕

中世初頭に、「艶詞」乃至は「隆房集」と呼ばれる作品が存する。従来、この作品の通り名は「艶詞」の方であつたと見てよいであろう。それは『扶桑拾葉集』『群書類従』『国文大観』などに、「艶詞」の名で収められていたことによると思われる。それが比較的近年になって、『桂宮本叢書』に「隆房集」と呼ばれる別系統の本文が収められて以来、この書名も研究者の間に次第に定着してきた。

ところで、『扶桑拾葉集』や『国文大観』に収められていること、『群書類従』では『枕草子』『方丈記』『多武峰少将物語』『江談抄』『続古事談』などと共に、雑部に収められていることは、この作品が物語、説話、隨筆に近いものという意識の下に、要するに散文文芸という意識の下に読まれていたことを意味する。それゆえ、艶書小説の萌芽と見る立場も当然考えられるのである。

それに対して、「隆房集」という書名、そしてそれが『桂宮本叢書』の私家集の部に収められていることは、これが私家集としても読まれうるということを意味する。そのような二重の性格を有するのが、この作品である。

本作品についての本文研究は、『桂宮本叢書』の解題^二に見える所説がまとまったものとしては最初であり、桑原博士^三の研究がこれに次いでいる。なお、秋山光和氏の御論^四にも諸本に言及された箇所がある。

これらの内、桑原氏の研究や『叢書』の解題では、諸伝本は三類に分けられている。

第一種本は総歌数一〇〇首から成り、各歌がかなり詳細な、乃至は具体的な詞書を伴うものである。『桂宮本叢書』に収められた書陵部本^五（函架番号五〇一・一三四）は御所本の由であるが、この系統に属する。以下、本稿ではこの系統を御所本系と呼びたい。

第二種本はやはり総歌数一〇〇首から成るが、詞書はおおむね簡略なものである。この系統に属する写本には、

京極黄門以自筆本写之早

右之奥書之本にて令書写

という奥書が見出される。書陵部蔵『隆房集』（函架番号一五四・五八九、阿波国文庫本）を始め、この系統の写本は少ない。以下、本稿ではこの系統を定家本系と呼ぶ。

以上二系統は、「隆房集」「四条大納言隆房卿集」などの名で呼ばれている。

それに対し、第三種本は「艶詞」「四条大納言日記」「隆房の恋尽し」「隆房卿艶書合」など、さまざまな名で呼ばれている。総歌数は八〇首である。即ち、御所本系・定家本系に見出される歌二十三首を欠き、代りに両系統には見出されない、長歌を含む三首を有する。詞書は御所本系に近いが、かなり異同がある。写本も多く、従来流布本的に読まれたのもこの系統であった。本稿ではこの系統を艶詞系と仮称したい。

桑原氏らの所説によると、この作品の本文系統は右の三類に整理されることになるのであるが、ここで問題となるのは秋山氏の紹介された『艶詞絵』（旧称「藤波絵草紙」）の絵詞の本文である。これは長歌とその末尾に添えられた短歌三首とから成るもので、艶詞系本文の一部と見られるのではあるが、艶詞系の本文では長歌に添えられた短歌は二首であった。その他、長歌の語句にも若干の異同が存する。とすると、別に一類を立てることはできないとしても、艶詞系の中に絵詞類なるものを考えてもよいかもしれない。

〔二〕

いずれかといえば零細な作品に属する本作が、どうしてこのようなさまざまな本文を派生せしめたのであらうか。この問題を考えることは結局本作をどのように捉えるかということに連なると思われるので、以下これを考えてみたい。

御所本系と定家本系との違いは、『桂宮本叢書』解題並びに桑原氏によって、御所本系の詞書を省略したことによって定家本系が派生したと考えられている。これは両系統の詞書を比較してみると、首肯できる。たとえば、両系統1番の歌の詞書は、御所本系ではこの作品全体の序となっている。即ち、

あらたまのとしつきをゝくりむかふるにつけて、おもふことなきにしもあらぬ身の、ひとしれぬこひちにさへ、
まよひいりぬるよしなさを、こはなに事のありさまそと、おもふあまりのなくさめに、むかしのあとをたつぬれ
は、

と書出し、恋に迷い悩み苦しんだ古の男女を引歌とともに叙して、

さそなむかしの人たにも、かゝるなけきもありけりと、おもひとれともとられねは、すきにしかたよりけふまて
に、つきぬおもひのかす／＼を、もしほくさかきあつてもみせたらは、さゝかにのいとおしともやいふとてな
るへし

と結ぶ、半ば長歌めいた長文のものであるが、それが定家本系では「いとをしとて」の六字に過ぎない。以下、

2 おもひしことのはかなさをなん

3 いそきかへるとて

4 かねてなけかしさに

5 せむかたなくて

6 しらすかほして

7 うらめしくて

8 月のにしにかたふく見るに

9 いとゝせむかたなくて

10 あはれにて

など、多くの場合御所本系の詞書の一部が定家本系の詞書となっている。本作の和歌は御所本系のごとき、乃至は艶詞系のごとき詞書を伴って始めて理解できるものが大部分で、定家本系のような簡略な詞書はほとんど見出しとしての役割しか果していない、一首一首の和歌の詠まれた状況の説明という役割を果していないと思われる。そのような詞書を有する定家本系のような本が先に存在し、その詞書に加筆増補して御所本系のような本文が生じたとは考えにくい。反対に、御所本系の詞書の一部を見出し的に切取って定家本系の本文が派生したと考えることが自然である。

では、そのような簡略本文はだれが作ったのであろうか。それは全く不明であるが、前掲の奥書から知られるように、この略本は定家筆本から出ていることを考えると、御所本系の詞書の簡略化は、定家の許でなされたのかもしれないという想像も可能であろう。定家は『新勅撰和歌集』に隆房の作五首を選んでいるが、その内三首は本作に見出

されるものである。或いは同集撰進の際、資料として人々から借用し、急遽書写したものの中に本作もあったのではないであろうか。その際時間を惜しむ余り、詞書はごく一部を見出し的に記すのとどめたのではないであろうか。撰集資料としてはそれで事足りた筈である。もとより、隆房自身がいわば底本である御所本系をまとめたのち、思惑があつて略本を作った、定家が入手し書写したのはその略本系だったと考えることも可能である。ただ、前掲の奥書にいう「自筆本」はやはり「京極黄門自筆本」の意であろう。

では、艶詞系本文の派生をどう考えるか。この問題を解くためには、まず御所本系と艶詞系との違いを明かにしておく必要があるであろう。

御所本系・定家本系に存し、艶詞系に欠く作品は、次の二十三首である。（歌番号は御所本での通し番号である）

七 おもひいつる事のひまなきまゝには、をなし心にやなからむと、うらめしくて

きみをわれおもひわするゝほとはかり われをやきみかおもひてさらむ

三 たちなからたにはるけはやとおもふも、かなはねは

二 三 さきやらぬうけらかはなのいふせさを いかてかきみにいひゝらくへき

あめかきくらしふるひ、はしをうちなかわれは、たまみつのひまなくおつるにつけて、にはたつみもひま
なくなり行を

一 五 つふ／＼といはねはこそあれたま水の あはれいつくにつもるおもひそ

なにとなくなやましくなりて、おとろ／＼しからねと、おきふしもたやすからぬを、これもたれゆへそ
と、まめやかに心うくて

三 〇 きみゆへのみたり心ちとはところせや おもひとけともむすはゝれつゝ

三五

つかのまもわするゝことなく、かなしければ
しはしたにいかてこひせぬ身とならん　くるしきものをねてもさめても

ところせきみからなる人なれば、うちあらはれてあはむことはあしかりぬへし、さりながらもこひしき
りは、身もいたつらにならはなれとおほゆれば

三八

かゝりとして身はいたつらになりぬとも　なけかし物をきみしあひみは

かゝりしほとのことなとしらせたりし人も、よしなきことゆへにかきこもりにしは、そのこゝろもわか身
のうへにやといとあはれなり、たよりもなければ、むけにかきはなれぬる心ちして

三九

あかなくにはなれし君かこひしさを　いひあはすへき人たにもなし

ふみなとゝりつくものさへ、いまはこゝろかはりして、ありしにもあらずときゝしかは

四一

うらめしやしつのをたまきをのれさへ　すぎにしかたにひきかへてける

わかこゝろはつきはてぬれと、すこしのあはれをかくることもなければ

四二

いかてわれきみに心をつくさせて　こひをくるしとおもひしらせん

四三

いまはひたふるにおもひはなちて、たまさかにかよひつるふみたにもかきたへぬれば
わりなしやまれのたまつきそれたにも　いまはかよはぬこひちなりけり

うたてくあたるにつけても、わか心はひとすちにおもひみたるれば

四四

わかなかのしとろもとろにみたるれば　いとゝおもひはしのふもちすり

ふみをとらすへきことありて、くれはつるまゝにいそきゆきて、ものなといひつたふる人をたつぬれば、
なければ、よにくちをしくおほえて

六〇 こゆるきのいそきてこそはきつれとも みるめかりほすあまたにもなし

わりなきひまにゆきたりしに、その夜かのつかふ人のこゝろあるさまにて、まくらをとらせたりしことの
わすれかたけれど、その人もいまはかきたえぬれは

六〇 おもふともたれかはしらむつけまくら つけやる人もいまはなき身そ

かくはかりたへかたくおほゆるならば、はかなき世に、とてもかくてもありなんとおもひとりて、いかな
らん所へもひきくしていなむとおもへとも、それも人きゝおひたゝしかりぬへし、またかくてもあるへき
心地もせず、とにかくにわれをくるしむる君なりけりとあちきなく

六九 いかにしていかにすへしとおほえぬは われと君との中にありける

むけにこひしくて、いかにすへしとおほえさりしかは

七〇 あなこひし恋しやこひし／＼を いかにや／＼いかにせん／＼

つく／＼とおもひつゝくれは、この世ひとつに、恋しかなしとおもふたに、いかゝはくるしかるへき、そ
のゝちのよにふかゝらんつみの心うさに

七一 あさからぬこの世ひとつのなけきかは ゆめよりのちのつみのふかさよ

いかになりぬるわかおもひそとあやしきまゝには、このよもうらめしくなりはてゝ、いければ人のとおほ
えて

七二 たゝさらはうきよの中になくもかな あれはそかゝるなけきをもする

このおもひのつきせぬまゝには、こゝろもあくかれて、よもうかりぬへきありさまなり、さてもまたいつ
こをさしてゆきとまるへき心地もせず、とらふすのへなりとも、そことおしふる人のなき身のはかなさの

思ひわつらはれて

九三

君ゆへにこの世をおもひはなちとり あはれいつくにねくらさためむ

これほとにおもひなから、さすかになからへてあはれは、ふかゝらぬこゝろこそおもふらめとおもふも、
とにかくになしくて

九四

かきりあれはいけるはかりそ世の中に かくてもあれはあるかは

このよにてたにありかたきちきりのほとなれば、こんよのこともさこそはと、たのむかたなくて

九五

このよにてあさきちきりはわたり川 のちのあふせもえこそたのまね

かくおもひつゝこの世をもあくかれて、いかならん山中にすかたをかへて、かすかなるすまひしたりと
も、これたにおもひわすれすは、まことのみちのさまたけともならんことの、こゝろうければ

九六

世をすてゝこけのころもをきたりとも かくこそぬれめ袖は涙に

まめやかになさけなきことこそあれ、しなんよには、さりとて人よりはあはれとおもふこともありなんも
をと、こゝろをやりておほゆれば

九九

恋しなはあはれをわれにかけるふの つねなき世とおもひしれかし

おほかたよにありとある人の、一日一夜かうちにたにも、つみとなるおもひの八億四千ありときこゆる
に、ましてかゝるおもひのつもるらんゆゝしさはいふにもたえず、さりとてはわれらにちきりふかくおほ
するさいはうこくらくの無量寿仏、これをたすけ給へとして

一〇〇

こひしなんのちのうきよをいかにせん 南無阿弥陀仏なもあみた仏

次に、艶詞系に存し、御所本系・定家本系が欠く長歌と短歌二首を『艶詞絵』絵詞によって示すと、次のごとくであ

る。(私意により、清濁を分かった。)

さてもわが 君につかへて こしかたは 春のみ山の はになれ いまは雲井の 月かげの のどかにてらす
御代にあひて 心ゆく事 おほけれど かすがの山の ふちなみの 木だかき色に ひとしれぬ 心をつくし
そめしより ねてもさめても わすられぬ 思のみなる よしなさよ かつみるうちも むねさはぎ みぬまは
まして けふいくか いつか／＼と またれつゝ さるはまたみる たびごとに 人にことなる ふし／＼は
はかなき事も さもぞたゞ ためしもなきと おもひしむ ことのおほさは ながはまの まさごのかずにた
とへても あかずおぼえて なにとして かくしも人に ことなると 思ふにつけて なか／＼に つらくさへ
こそ おぼえけれ けふ又みても またこひし 見るかひおほき たまづさは さらにいはず 手にふれし
物としなれば はかもなき ちりのはしまで なつかしみ とりつみぞをく かくまでに たゞあぢきなくお
ぼゆるに みかさの山の さかき葉の 宮このたびに うつるとか あめの下みな さはぎつゝ わきて如何に
とおもふにも さはぐ心は しはかぜに くだくる浪に ことならず いかによとのみ やすげなく 思ふも
しるし 雲のうへに かよひしみちは たえまおほみ たま／＼はたゞ ともしびの 影ほのかなる よひのま
の なごりはさらに さてしもぞ せむかたもなき こゝちなる としたちかへる いそぎにも なにそは春の
ひかりとも たれをかまたむ すさまじや 花のにしきを たちきても 君みぬ色は ものうくて こといみ
しあへぬ なみだこそ たもとにかゝれ かくしつゝ む月のこゝぬか やゝふけし 夜はにあひみし そのほ
どの 心のまよひ いへばえに たとへていはん かたもなし そのゝちさらに 恋しさの 色をそへぬる 心
地して やがてうかれし たましゐは 袖のなかにや いりにけむ 身にはかへらず つく／＼と ながむるこ
ゝろ いとゞしく あられぬまゝに さりとは 神ほとけにぞ いのらめと たのみなれにし みたらしの

水のながれを たづねても みそぎかひなき あちきなき さてもかたえの もろ人に またさそはれて ちはやぶる 神の北野に おもむけば はれぬこゝろを しりがほに 空さへくれし あめのうち あまやどりしてをぐるまを かれとばかりに 見やられし 竹のひとむら めにかけて さてだにしはし あらばやと 思ふかひなく やりすぐる なごりよいかに これさへに 忍がたきを こまならば ひのくま河に あらずともひきもとめまし あやにくに とをざかりゆく 木ずゑさへ ほのかになりし ほどはげに そとろにすゝむなみだこそ せきもとまらず おちまされ さてもかゝらぬ おりならば てうはい節会 じよぬ除目 これらのたより さなら^(でか)も 見ましなれまし いはましと たゞおも影の たちぞゝふ 春になりても けふははや廿日になりぬ あかざりし たゞ一たびの ときのまの そればかりなる うさよげに 如何にやいかにいかにせむく

ふりかすむ雨に涙もおちそひてかきくらされしみちの空かな

ためしなき心のうちをことの葉にいはゞあさくもなりぬべきかな

しるらめややどの木ずゑをかれとのみなみだのうちにながめやるとも

ただし、『艶詞』では右の「しるらめや」の歌一首を欠く。

その他、顕著な違いとして、御所本系・定家本系とで艶詞系とは著しく位置を異にしている歌が一首ある。本作から『平家物語』の小督の件りに採られたと考えられている二首のうちの一首、「たまづさを」の歌である。御所本ではこの歌は四〇番の歌となっており、次のようにある。

わりなくてふみもとらせたりしを、つちになけおとしてとらざりしかは、いとほしたなくうらめしなから、人もそみるとて、とりかくしてしことを

たまつさをいまはてにたとらしとやさこそこゝろにおもひすつとも

これが艶詞系では、

わりなくして文をとらせしを、土になげおとして、とらざりしかば

という、心理描写を省いた詞書となっており、通し番号を付けると67番の歌となる。前記のごとく、御所本系は百首から成るから、その四〇番は前半部となるが、八十首から成る艶詞系では全体のかなり終り近くに位置することになる。

御所本系と艶詞系との異同は極めて多いが、そのうち次のような場合は行為の主体が入れ換ってしまっていることが注目される。

御所本

そのよ、しつかなりしかは、さま／＼かたらひし中に、ひさしくよにもなからふましきゆめをみたるといひ
しかは、ゆゝしくあはれけにおもひて、さらむよにはいかゝせんとするといひし事の、わすれす思ひいてら
れて

五九のちのよをあはれときみかいふならはしなむいのちもなにかをしません

群書類従本

久しく世にあるまじき夢を見るといひし事の忘れがたくて

47後の世を哀と君がいふならばしなん命も何かおしまん

御所本では夢を見た人は男で、女はその話を聞いて案ずるのであるが、艶詞系本文では女が夢を見たという記述になっている。しかし、和歌の内容が御所本のごとき記述の詞書に適合するものであることは明かである。

以上のような異同を、桑原博史氏は次のように説明された。

〔三〕 この兩本の末尾部分のちがいは、第一種本（引用者注―本稿では御所本系と呼んだもの）を先行するものと考えるのに都合がよい。なぜならば、第一種本の末尾二首は、恋い死にしそうな自分の苦しさを阿弥陀仏に救ってくれと祈る激情があふれているが、第三種本（引用者注―本稿では艶詞系と呼んだもの）ではこれに代えて、長歌と短歌二首を配している。長歌では、ふたたび恋のなれそめから回想して現在春をむかえた二〇日、なお悲しみにひたっていると訴えてはいるが、第一種本のもつ激しさが沈潜して、短歌も「降りかすむ雨も涙に立ちそひて」とうたうやわらいだものになってしまっているのである。このちがいは、生ま生ましい経験の意識されていた時点と、やや冷静につきはなして回想できた時点と、執筆時の差から生じたのではあるまいか。

御所本系に男の激しい情熱を物語る記述が存し、艶詞系がそれを欠くことは、確かである。しかしながら、艶詞系の叙述が「やや冷静につきはなして」なされているとは筆者は思わない。男の愛執の情念の未練がましさは、両系統において大差ないと見る。回想的ということもまた、既に御所本に見出されたことであつた。

……みちのくにちかのしはかまとかきて、なけおせたりしことの、つねはおもひいてられて（二二）

……これはなにそとゝひしことの、わすれかたければ（二三）

……人もそみるとで、とりかくしてしことを（四〇）

……さらむよにはいかゝせんするといひし事の、わすれす思ひいてられて（五九）

……そのふみをうちもおかすまもられしことを（七一）

……かへるさのみちにまとひたりしことも思いてられて（七六）

……かへりことなとせしおりのことなどもおもひいてられて（八七）